

「ご、ごめんなさい。やっぱり無理だわ。今日はもう帰ってくれない？ 達也くん」

肉体を覆っているのが、ブラウスと下着だけになり、後悔の念に襲われたのだろう。綾乃が消え入るような声で言った。

恥じらう綾乃の妖艶な美しさに、達也は息を呑む。今日を逃せば、綾乃の裸体を目にするチャンスは二度と来ないと思った。

「駄目だよ、綾乃さん。それでは約束が違うよ」

すらすらと浅ましい言葉が口から出てくる。綾乃の肉体をあきらめて帰るなんて、達也には考えられなくなっていた。

思いつめたような達也の表情に気づいたのか、綾乃は唇がかすかに震えている。

「達也くん……」

「綾乃さんの裸を見たいよ。それだけでいいから……まずは胸だ」

達也は渴いた喉から言葉を絞りだした。このまま帰ったら、妄想にうなされて、気が狂ってしまいそうだ。

「……わかったわ」

綾乃はうつ向いた。達也の切羽つまった欲望は、彼女にも伝わったのだろう。綾乃はブラウスの裾から背中に入れた手を入れ、ブラジャーのホックをはずした。



張りのある肉が、ブラのカップを跳ねあげる。ストラップが肩からずれて、乳房がこぼれそうになったが、綾乃はすぐに手で胸を押さえた。

裸体を見せると約束した綾乃だが、達也の熱い視線を前にして、恥ずかしさがこみあげてきたのだろう。

「見せてよ、綾乃さん」

達也はじつと見据えて要求する。

きつぱりと言いきる達也に、綾乃もあきらめるしかないと悟ったのだろう。両手をゆつくりと胸から離れた。

カップがはずれ、白い肉の膨らみが達也の目に晒された。達也は、まばたきをするのも忘れて見つめた。

巨乳とまではいかないが、形のよい充分なボリュームのある乳房だ。薄いピンク色の乳首が、ピンツと斜め上を向いている。

裸の胸を露骨に見つめてくる達也に、綾乃は哀願するような表情だ。

「まだ、ブラウスが残ってるよ。そして下も」

達也はうわずった声で言った。ズボンの下ではペニスが首をもたげ、腫れて硬くなっている。